

『自由貿易』はピークを過ぎたのか



JOI シニアフェロー 軽部 謙介
帝京大学 教授 (元 時事通信社 解説委員長)

物事には、必ずピークがある。

プロ野球のイチロー選手。米大リーグで活躍していた 2000 年代半ばを全盛期とみる専門家は多い。

東証株価が 3 万 8915 円を記録した 1989 年 12 月 29 日。バブルの頂点はこのあたりだった。

では、自由貿易を求めるムードが最高潮に達したのはいつだったのだろうか。個人的には 93 年 12 月 15 日だったのではないかと思っている。7 年にわたり各国が角突き合わせていたウルグアイ・ラウンド (多角的貿易交渉) が全面妥結に至り、世界貿易機関 (WTO) の設立も合意された日だ。個人的な話で申し訳ないが、実はその現場に居合わせた。

場所はジュネーブ。夕刻だった。会議の終了を告げるギャブル (木槌) が振り下ろされた瞬間、会場は拍手と歓声に包まれた。各国の代表団や外交官たちは、会場の様々な場所に陣取り臨時の「出店」をセットして陽気にワインを振舞っていた。いつもはツンとして怖そうな米通商代表部 (USTR) の女性幹部が満面の笑みで“お酌”してくれたことを鮮明に覚えている。

「さらなる自由化を目指そう」。会場はそういうムードに満ちていた。自由貿易は世界の成長のエンジンだ。そんな認識も共有されていた。

しかし、時代は暗転する。期待されたドーハ・ラウンド (多角的貿易交渉) は途上国を無視できず無残に失敗。WTO の紛争処理プロセスも上級委員会の欠員を補充できず事実上の機能停止に追い込まれた。「自由貿易＝グローバル化」という図式で、WTO 閣僚会合が反対派の抗議デモにより混乱したことも。そして、各国は自由化の王道ではないはずの、二国間・地域間の自由貿易協定 (FTA) に走った。

実は、今自由貿易の進展をブロックしようとして試みているのは、30 年近く前、ジュネーブで勝利の美酒に酔っていた登場人物たちだ。

米国は「安全保障」を理由に中国との「デカップリング (切り離し)」を主張する。確かに WTO の規範となっている関税貿易一般協定 (GATT) 21 条は「自国の安全保障上の重大な利益の保護のために必要」とされる措置は認められると定めているが、「鉄鋼輸入が増え

たので、いざという時戦車を造れない」というロジックは想定していないはずだ。

また、欧州連合（EU）は地球温暖化対策が十分ではない国からの輸入に対して追加的な関税をかける構想を明らかにしている。この「国境措置」が国際ルールに適合するのは明確ではないが、裁判官役の WTO は活動休止中。

傍若無人な振る舞いをやめない中国に対峙する必要性もわかるし、気候変動は人類の生存という高度な問題だということも理解できる。しかし、自由貿易はもう時代遅れなのか。

米国のジャーナリスト、スティーブ・ドライデンによれば、第二次大戦後の世界秩序構築を模索したトルーマンやアイゼンハワーらの時代、「世界中に自由貿易の福音を広げることが、米国の国際経済政策の支配的な目標になった」のだという（『トレード・ウォーリアーズ』）。

それから時は経つ。保護主義の連鎖が世界大戦を招いたことを反省し自由貿易の理想を目指す。これは「ブレトンウッズ体制」の柱の一つだったはずだ。「ピークは 93 年でしたねえ」などと懐古趣味的に語るのではなく、自由貿易と制限措置のバランスをどうとっていくのかを真剣に考える時代が来ている。